

日本語を母語とするスペイン語学習者の読解プロセスに関する ケーススタディー

品部 直美

アブストラクト

スペイン語で書かれた文章を読んで理解することは、日本語を母語とする学習者にとって容易な課題ではない。そこで、スペイン語教育において、学習者がどのようにテキストを読み進め、どのように理解に至るのか、その認知プロセスを知ることは、有益であると考えられるが、読解のプロセスは直接外部から観察できるものではない。本稿では、スペインの滞在歴が2年半以上になる3名の日本語母語話者の協力を仰ぎ、think-aloud protocols及びインタビューにより、彼らがどのようなプロセスを経てスペイン語で書かれたテキストを理解し、どのようなことが理解の妨げとなっているのかについて、その読解プロセスの一端を分析した。3名の学習者は、一つのテキストについて、それぞれに異なった理解に至ったが、未知の単語など言語的レベルの問題のみならず、テーマに対する背景知識や価値観といった要素が重なり合って、テキストの解釈の歪みを生み出していることが観察された。

キーワード：スペイン語教育、読解プロセス、think-aloud protocols

1. はじめに

スペイン語を学ぶ日本人学習者にとって、スペイン語で書かれたテキストを読んで理解することは容易な課題ではない。言語情報が次々と提示されて瞬時に消えるのを理解しなければならない聴解や、相手に素早く口頭のリアクションも返さなければならない会話の場面と比べると、読解は手元にある言語情報を学習者のペースで読むことが許されるという意味では、学習者の心理的負担が少ない。しかし、実際に日常の場面、あるいは職業の場面で、さまざまな種類のテキストから情報を得るという必要に迫られた場合、相応の読解スピードと理解の正確さが求められるため、学習者が困難に直面することは想像に難くない。実際、スペイン語の検定試験 Diplomas de Español como Lengua Extranjera (DELE)においても、日本人学習者の読解テストの成績は、他国の参加者と比較して下位に属している (Shinabe 2003)。

文章を読んで理解することは、一見受動的な印象を与える活動であるが、実際は読み手による活発な認知活動を要する作業である。この読解プロセスを説明するモデルとして相互作用モデル (interactive models) がある。Eskey (1988)によると、この相互作用は、文字、語彙、構文等、ローカルなレベルのテキスト情報の解読から文章全体の理解へと向かうボトムアップ (bottom-up) の過程と、読み手の推測や背景知識の利用といったより大きな単位から理解を進めるトップダウン (top-down) の過程との間で起こる。

読み手がさまざまなレベルの情報を同時並行で処理しているというこの考え方は、外国語の学習者の読解について考察する上でとりわけ重要である (Eskey 1988; Grabe 1988)。母語で書かれたテキストを理解する場合と異なり、外国語のテキストでは、読み手は言語情報を自動的に処理できるわけではなく、多くの認知能力を個々の語や文の理解に割かなくてはならない。Carrell (1988)によると、言語処理能力が不足することによって、外国語学習者の読解はトップダウンのプロセスに過度に依存するか、反対にボトムアップのプロセスに集中する傾向にある。トップダウン・プロセスへの依存は、言語レベルのあまり高くない読み手が意識的にであれ無意識的にであれ、言語情報の解読という認知的に負担の大きい作業を避けようとすることから生ずる。そのようにボトムアップ・プロセスを避けようとする時、例えば読み手はテキストの中で理解できた言葉と自分の持っている背景知識とを関連付けながら、テキストの内容を推測し、独自の理解を構築する (杉山・田代・西 1997)。他方、これとは反対に読み手がボトムアップ・プロセスに過度に意識を集中させる場合、読み手はテキスト上の一つ一つの言語情報を認識、蓄積するが、それをテキスト全体の文脈の中で位置づけ、背景知識と関連づけるという、全体的なアプローチが不在になりがちである。スペイン語を学ぶ日本語母語話者にとっても、語彙、構文を含め、スペイン語の言語情報を処理することは認知的負担の大きい課題であり、その

ことがトップダウンとボトムアップの双方のプロセスを上手く相互作用させながらテキストを理解していく上での障害となり得る。

ボトムアップに必要なスペイン語能力が不足しているということは、学習者自身にも意識されやすいタイプの問題である。Shinabe(2003)がスペインでスペイン語を学ぶ日本語母語話者の学習者 157 人に行ったスペイン語学習に関するアンケートによると、91.7%の回答者が未知の語彙が頻出することが読解の障害になっていると答えている。これに対し、社会文化的知識の不足やディスコースレベルでの問題についても、外国語で書かれたテキストの理解の成否を左右する重要な事項であるが (Floyd & Carrell 1987; Geva 1992; Horiba 1996)、これらの問題をスペイン語を読む際の困難だと意識している学習者はアンケート回答者の半数程度にとどまっている。¹

学習者は、実際に自身の読解のプロセスや問題点についてどの程度正確に把握しているのだろうか。Cohen(1998)が述べるように、文章を読む時に読み手が使用する読解ストラテジーに関して、アンケートで知ることができるのは、読み手がテキストを読む時に実際にしていることよりも、読み手がしていると考えていることである。そうであるならば、学習者自身が指摘する読解の問題が、実際に学習者が抱えている問題と完全に一致するとは限らない。また、反対に学習者自身には意識されていなくても、文章の理解を妨げる要因となるような問題も存在し得る。

読解するとき読み手が辿る認知過程は、外部から観察可能なものではない。そこで、本論では スペインで生活する日本語母語話者3名の協力により、かれらが文章を読んでいる最中に起こった内省的思考を think-aloud protocols の手法で収集し、更に読解終了後のインタビューによって、どのようにテキストを理解したかを分析した。この分析の目的は、多くの学習者に当てはまる一般的な行動や問題点を指摘することにあるのではなく、それぞれの読み手が一つのテキストを理解していく過程を丁寧に追うことで、読解過程の一例を知ることにある。具体的には、1) どのように日本語母語話者の読み手はスペイン語のテキストの意味を構築したか、2) 上手くテキストが理解できない場合、どのようなことが原因となっているのか、特に学習者自身にも意識されやすい語彙力の不足はどの程度読解の成否に影響を与えているのか、という点について検討する。

2. 調査方法

2.1 調査対象者

本稿の調査にご協力頂いたのは、バルセロナ在住の日本語母語話者3名で、以下 A、B、C と呼ぶ。データを収集した時点で、スペイン語のクラスを受講しているのは B のみであり、他の二名は授業に出席するというフォーマルな形態のスペイン語学習はひとまず終了した状態である。表 1 に見られるように、スペイン語学習歴とスペイン滞在歴については、個々の学習者によってばらつきがあるが、一番滞在歴および授業受講歴が短い A でも、2年7ヶ月スペインに滞在し、1000時間近いクラスを受講していることから、総じてスペイン語学習に恵まれた環境にある3名であるといえる。

この3名の実際のスペイン語能力に関し、学習者 A と C については、資格試験等で客観的に言語能力を証明できる指標はない。しかし、C は日本でスペイン語専攻の大学を卒業しており、A もスペイン語を学ぶ目的で学生ビザを取得してスペインに入学し、集中的に勉強した経験を持つことから、両名とも最低限スペインで日常生活を送る上で支障はないスペイン語力を持っていると考えられる。

他方、学習者 B については、スペインの公立語学学校(Escuela Oficial de Idiomas)に在籍しており、そこでレベル3のディプロマを獲得している。これは、ヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages)の B1 レベルに該当する。3名の学習者の内、もっともスペイン語授業の受講時間数が長いのが B であるが、勉強時間数の割には学習進度が遅く、B1 レベルに達するまでに、通常よりもかなり多くの時間が掛かっている。また、B 自身も言語学習があまり得意ではないと認識している。

表 1： 調査対象者のスペイン語学習歴

	日本でのスペイン語学習歴	スペインにおけるスペイン語授業受講歴	スペイン滞在歴
学習者 A	4 時間	9 6 0 時間	2 年 7 ヶ月
学習者 B	1 2 時間	1 8 3 2 時間	2 年 8 ヶ月
学習者 C	4 4 4 時間	1 1 5 2 時間	4 年

2.2 データの収集

使用したテキストは、読解研究用教材に修正を加えたもので、日本人母語話者にとって、特別な文化的知識がなくとも理解可能な内容であり、調査対象者のスペイン語力と照らし合わせて適当と考えられる語彙と構文から構成されている。このテキストは、407 単語、5 段落からなる短い論説文である。²

データの収集は、筆者と調査対象者が 1 対 1 の状況で、次の 4 つの手順に沿って行われた。

- ①事前インタビュー：まずテキストを読む前に、調査対象者のスペイン語学習歴に関するインタビューを口頭で行い、その後スペイン語の文章を読む際に問題となると感じていることについて、アンケートに記入してもらった。³
- ②Think-aloud protocols の練習：筆者が think-aloud protocols のやり方について説明した後、本調査には使わない他のテキストで読む練習を行った。テキストを読む際には、発音は気にせず、声に出してテキストを読み、その時々で考えていることを日本語でもスペイン語でもいいので、言葉にして表現するよう指示した。また、読み終わった後、理解した内容を説明する必要があると知らせておいた。
- ③テキストの読解：調査対象者がテキストを読んでいる間、筆者は同じ部屋の斜め後ろに座り、読解の邪魔にならないようにしながら、その行動を観察した。
- ④事後インタビュー：テキストを読み終わった後、調査対象者に理解した内容を説明してもらい、その後筆者がテキストの内容や難しいと感じた点などについて、質問した。なお、読解の最中の学習者の発言及び事後インタビューの内容はすべて録音した。

3. データの分析とその結果

3 名の調査対象者の内、C は自分の思考を声に出しながらテキストを読むことが上手く出来なかったため、C の think-aloud protocols のデータは分析対象から外さざるを得なかった。事前に他のテキストで練習を行ったとはいえ、このような日常的に行うのとは違う方法でテキストを読むことは簡単ではなかったようである。A と B も、読解終了後のインタビューにおいて、考えていることを声に出すことが難しかったと述べたが、この両名のデータは読解の過程を一定程度推測させるものであったため、分析対象とした。従って、本稿で分析したのは、A と B の think-aloud protocols のデータ、3 名の学習者の事前インタビュー及び事後インタビューのデータである。

スペインでの滞在歴が 2 年半以上あり、日常生活においてスペイン語で多くのことを行っている調査対象者のスペイン語力ならば、用意したテキストを理解することはあまり困難なことはないであろうというのが、当初の筆者の予想であったが、実際事後インタビューで理解した内容を聞いてみると、テキストの内容とはかなりのずれがあることが分かった。理解した内容も、理解に至るまでの過程も 3 人それぞれであるため、まず最初に 3 名がどのようにテキストを

理解したかについて整理し、その後 A と B の think-aloud protocols のデータを基に、両者の辿った読解のプロセスについて述べる。

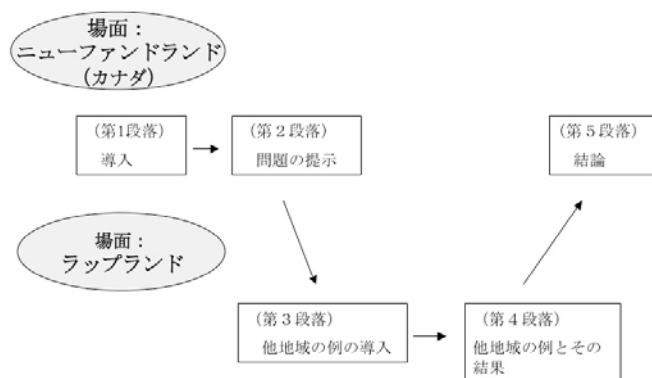
3.1 テキストの内容理解

本研究に使用したのは、「El futuro de un cazador de focas (アザラシ猟師の将来)」というタイトルのテキストで、5つの段落で構成されている。このテキストを大きなディスコース単位でとらえたとき、その意味的まとまりであるマクロストラクチャ (Macrostructure) (van Dijk 1983, 1985) と、マクロストラクチャが文章全体の構成においてどのような機能を担っているかを表すスーパーストラクチャ (Superstructure) (van Dijk 1983) を段落毎に下記に表した。

表2：テキストのマクロストラクチャ

第1段落	カナダのニューファンドランドに Jean というアザラシ猟を専門とする猟師がいる。
第2段落	ニューファンドランドでは、アザラシの数が減っていることから、アザラシ猟に反対の世論がある。
第3段落	ラップランドでは、アザラシが禁猟となったが、猟師の失業対策として人工皮革の工場を建設した。
第4段落	ラップランドでは、アザラシ猟師の職業転換は上手くいった。
第5段落	Jean は将来カナダでアザラシ猟が禁止される可能性を前に、職業を変えることを考えている。

図1：スーパーストラクチャ



このテキストは、ニューファンドランドでアザラシ猟を営んでいる Jean という人物が直面している問題が主題となっているが、第3、第4段落ではラップランドという別の地域で同様の問題がどのように扱われているかという一例が挿入されている。この文章を理解するためには、この二つの地域が並行して比較される関係であるということを抑えてお

く必要があるが、学習者にとってはこの関係を理解するのが難しかったようで、テキストの内容解釈のずれを生じさせる大きな原因となった。

学習者 B は、第 3 段落と第 4 段落がラップランドについて扱っているということが分からず、テキスト全体を通して、カナダを舞台にして話が進んでいると理解した。C は第 3 段落は、ラップランドに場面が移ったと解釈できたが、第 4 段落はもう一度カナダに話が戻ったと考えた。A はラップランドが例として紹介されていると考えたものの、ラップランドの例が本筋であるカナダの話と意味的にどういう繋がりを持つのかという点が理解できないようであった。これらの解釈上の問題は、いくつかの原因が重なり合って生じたものである。調査対象者間に解釈の誤りで共通している事項もあるが、その解釈に至るまでの思考の道筋は様々ではない。そこで、それぞれの読み手の解釈とテキストの内容との齟齬についてもう少し詳しく見てみたい。

3.1.1 主人公とその同僚及びカナダの現状をめぐる解釈

表 3：学習者によるテキストの内容解釈

	A	B	C
1. カナダでは既にアザラシ猟が禁止されているか。	?	Yes	No
2. Jean はすでに職業を変えたか。	No	Yes	Yes
3. Jean の同僚は今工場で働いているか。	No	Yes	Yes
4. カナダでは既に人工皮革の工場が建設されているか。	Yes	Yes	Yes

表 3 は、Think-aloud protocols 及び事後インタビューのデータを基に、4 つの事項に対する調査対象者の解釈を推測した結果である。実際のテキストの解釈では、これら 4 つの質問には全て No と答えるのが正しい。いずれかの項目を Yes と解釈するのは、カナダのニューファンドランドとラップランドの二つの地域に関する内容の区別がついていないことによると考えられる。

テキストの内容を全く正反対に解釈したのが B である。B は第 3 段落と第 4 段落が直前の二つの段落とは違う地域について扱っているということを認識していなかった。事後インタビューにおいて、人工皮革の工場はどこにあるのかと質問されるまで、テキストの話は全てニューファンドランドを舞台として展開されていると考えており、ラップランドの存在自体を完全に無視してしまっていた。手元にあるデータの限りでは、何故 B がラップランドに注意を払わなかったのかという理由を知ることはできないが、第 3 段落最初のフレーズで、“Así se hizo en Laponia”（ラップランドではそのようにした）という文脈の流れのキーワードとなる要素を見逃したことが一つの可能性として考えられる。更に、事後インタビューで B は筆者にスカンジナビアはどこにあるのかと尋ねている。ニューファンドランドとラップランドがそれぞれどこにあるのか分かっていなくても、テキストを読めば 2 つの場所が別々の地域であることは明らかであるが、地理的知識が不足していたことで、2 つの地域を別々のものとしてイメージしづらかったという可能性は否めない。

A の解釈については、表 3 の第一の質問をどのように理解したのかは不明である。その他 3 つの問いについては、カナダの主人公の住む地域にはすでに人工皮革の工場が作られていると間違っ解釈しているが、主人公とその同僚がアザラシ猟師の仕事をやめたとは考えていない。この場合、2 番目と 3 番目の質問については正しく答えていることになるが、実はこの 2 点についてもテキストを正しく理解した上で No の回答に至っている訳ではない。A の解釈とテキストの内容との齟齬は、動詞の活用形に表現された意味を把握できなかったという文法的問題、アザラシ猟というあまり

馴染みがない事柄に対する文化的知識から生じた誤解、内容上重要となるキーワードの意味を知らなかったという語彙の問題という少なくとも3つの要素が重なり合って生じたと考えられる。

第1の動詞の活用に関し、第2段落最後の部分 “Una medida podría ser, por ejemplo, construir una fábrica de piel sintética de foca: esto daría trabajo a los cazadores y la venta de las pieles sintéticas generaría beneficios importantes para toda la región.” に使用されている “podría”、“daría”、“generaría”の動詞は、いずれも過去未来形である。ここでは、人工皮革の工場を建設することが、アザラシ猟を禁止した場合にアザラシ猟師の仕事と生活を保障する一つの例として挙げられているが、この過去未来形で表現されているのは、人工皮革工場建設が一つの仮定にすぎず、現実に既にそういう風になっているわけではないということである。しかし、Aはこのテキストの該当部分を読んだ後、“vale, hasta ahora no vendía piel de focas. No sabía. Sólo comía o algo” (分かった。今まではアザラシの皮を売っていなかったのか。知らなかった。食べたりしていただけだと思った)と発言している。これは、Aが工場の建設を仮定としては受け取らず、既成事実として理解したことを意味する。この文法的解釈の間違いにより、表3の4番目の問いをYesだと理解してしまったと想定される。

第2の問題は、アザラシ猟というテーマに関してAが思い描いた文化的知識がテキストの内容と一致していなかったことである。Think-aloud protocolsで、テキストのタイトルを読んだ後、Aは次のように述べている。

cazador de focas/uh::a lo mejor/está reduciendo focas/((risas))a lo mejor está prohibido/cazar tantas focas/me suena que que ainus/uh: se come focas y eso/pero//ainus está///hay focas y pescado por eso está permitido cazar focas/pero/pues, a lo mejor la gente normal es/pues/hay límite o algo así/no? no lo sé. bueno/eso da igual XXX

(アザラシ猟師。うーん、もしかしたらアザラシが減っているのかも。ひょっとしたらあまり多くのアザラシを狩ることは禁止されているのかも。アイヌの人々がアザラシを食べるって聞いたことがある。でもアイヌは・・・アザラシと魚がいて、だからアザラシを捕ってもよくて、でももしかしたら、普通の人は捕る量が制限されているのかも。そうじゃない？分からないけど。まあ、それはどうでもいいか。)

Aの発言は、テキストのタイトルが読み手に喚起した思考の例として興味深い。テキスト全体の内容にも密に関連する背景知識が呼び起こされていることから、一見、後の読解に肯定的な影響を与えようであるが、問題はアザラシ猟の目的は主に食肉であると考えてしまったことである。Aは、主人公 Jean とその猟師仲間、主にアザラシの肉を食べるために捕っていると考え、“uh, si caza es mejor aprovechar aunque sea piel ¿no?” (うーん、もしアザラシを捕るのなら、たとえ皮といえども利用した方がよいね?)と発言している。テキストによると、アザラシの狩猟目的は、主にその皮革を利用することであり、だからこそアザラシを禁猟した場合に合成皮革の工場をつくるということが狩猟の代替案となり得る。しかし、Aの解釈によると、アザラシは食肉用であり、アザラシが食料である以上、皮の工場を作るということがアザラシ猟を禁止した場合の解決策とはなり得ない。Aの理解では、皮革工場は肉を食べた後の副産物であるアザラシの皮を有効利用するための施設ということになり、そうであるなら工場建設とアザラシを食べるために捕っている主人公との関係は不鮮明になる。Aがテキストのテーマに関して喚起した背景知識は、ここでは読解を助けるというよりも誤解を生む原因の一つになってしまった。

この皮革工場の役割をAにとって余計に分かりにくいものにして第3の問題が、語彙である。このテキストでアザラシ猟禁止の代替措置として挙げられているのは、アザラシの合成皮革工場の建設であるが、Aは「合成の」という意味に当たる “sintética” という形容詞を知らなかった。そのため、皮革工場で生産するものが人工的に作られたアザラシの皮ではなく、本物のアザラシの皮革だと考えてしまった。すでに述べたように、Aの解釈では、皮革工場は主人公の住む地域に既に存在するものであり、アザラシ猟師等は、主に食肉用にアザラシを捕っているため、食肉用に捕ったアザラシの余った部分である皮を工場に売却して副収入を得ているということになっている。Aは、表3の2番

目と3番目の点に関し、主人公と猟師仲間は、猟師をやめて工場で働いている訳ではないと理解しているものの、それは合成皮革工場がまだニューファンドランドに建設されていないためではなく、皮革工場と猟師の仕事との関係を理解していないためである。つまり、アザラシ猟師達はアザラシの肉を得ることが仕事であり、工場でアザラシの皮を加工している人々は主人公とは関係のない別の労働者だと解釈しているわけである。

学習者 C については、第3段落でラップランドの話が導入された後、第4段落でまたカナダに話が戻ったと考えてしまったところから、解釈のゆがみが生じた。読後のインタビューで、テキストの内容について説明する際、C は第4段落を指さしながら、それがカナダについて書いてある段落だと言った。第4段落は“Desde entonces, la vida de los cazadores en ese país ha cambiado mucho.”（それ以来、その国のアザラシ猟師の生活は大きく変わった）という文で始まり、“Desde entonces”（それ以来）や“ese país”（その国）は直前の段落の内容との繋がりを示すディスコーンマーカであるのに、そのことを上手く認識できなかったようである。アザラシ猟師が工場で働いていることについて書かれている第4段落をカナダの話だと理解してしまえば、表3の3番目と4番目の問いをYesと解釈するのは当然である。1番目と2番目の問いについては、第5段落を正確に理解できれば答えられるものであるが、主人公が既に職業を変えたかということについても、間違った解釈をしている。事後インタビューでこの点について Jean がもうアザラシを捕るのをやめてしまったかと尋ねたところ、しばらく考えた後、それについては「書いてなかった」アザラシ猟は「していないと思います」と答えた。おそらく、C は第5段落で主人公が職業を変えるかどうかについて悩んでいると書いてあるのを上手く認識できなかったのであり、そのためラップランドのアザラシ猟師が工場で働いているという第4段落の情報を基に主人公もすでに職業を変えたのだと推測したと考えられる。

3.1.2 アザラシの保護のために工場が必要なのはなぜか

工場の建設がどうしてアザラシの保護に資するのかを理解することは、テキスト全体の内容を把握する上で不可欠である。アザラシ猟師は、アザラシの皮を得ることが目的であるから、もし本物の皮革の変わりに合皮を使えば、アザラシを捕る必要はなくなるし、アザラシ猟師も工場で新たな職を得ることができる。この点について、学習者 A と C はそれぞれにテキストとは違った解釈をしているが、大きな文脈を上手く掴めなかったことが、テキストのもっと小さな単位の解釈にも影響を及ぼす結果となった。

特に問題となったのが、すでに前項で A の解釈との関連で触れたように、“sintética”（合成の）という形容詞の意味である。読後のインタビューで、A はこの形容詞の意味について、次のような興味深い推測を行っている。

筆者：“Sintética”っていう言葉は分かった？

学習者 A: 初めは、偽物なんかになって思ったん。あまり狩猟せずに済むで、その foca (アザラシ) に似た fábrica (工場) を作るんかなと思ってんだけど、後から読んでみたら、なんか違うような感じ。

筆者: 今はどういう意味だと思う？ “sintética” って。

学習者 A: Piel sintética... うーん... うーん... なんだろう。Piel auténticas (本物の皮)

筆者: じゃ、もしね、これが最初読んだ通りの意味だとして、本当の皮だったら、文章の解釈変わっちゃう？
(注: 「本当の皮」は「偽物の皮」の言い間違い)

学習者 A: うん、後からね。だって、それ、偽物だったんなら、狩猟せんでも済むで、focas (アザラシ) を、減ることがないやろ。Focas (あざらし) が減ってく訳がないから、そのことには触れてないで、減っていつてるってことは、狩猟している、で、fábrica も建っている。ってことは、pieles (皮) の fábrica (工場)、どういう意味なんだろう？ うーん、その商品にできる皮みたいな意味になるんかなあ？ うん、分かん。

“Sintética” という単語を「本物の」と理解した理由を説明している最後の発言は少し分かりにくい、次のようなことであろうと思われる。既に主人公 Jean の住むニューファンドランドに皮革工場がある。皮革工場が合成の皮を扱っているとしたら、アザラシ猟をする必要がなくなるはずであり、そうするとアザラシの頭数の減少に歯止めがかか

る。しかし、テキストはアザラシの数が減り続けていると言っているので、工場で扱っているのは本物の皮でなければならず、アザラシ猟師は今も猟を続けていてアザラシの皮を工場に売っている。

前項でも指摘した通り、解釈の歪みを生じさせている最大の原因は、A がニューファンドランドに既に皮革工場が建設されていると考えていることである。A は“sintética”という単語が偽物の皮を意味するかも知れず、合成の皮革を生産するならば、アザラシ猟は避けられるという関係に気づきかけている。しかし、既にこの皮革工場が実在すると解釈したことで、「工場の存在がアザラシを救う」という因果関係を、「工場があるのにアザラシは減り続けている」と正反対にとらえてしまった。さらに、A はアザラシ猟の主要な目的を皮ではなくて肉を捕ることと考えているため、工場の存在とアザラシの禁猟との関係を理解し、そこから正しく“sintética”という単語の意味を推測することがより困難になったものと思われる。

“Piel sintética” (合成皮革) という単語については、学習者 C もよく理解できなかったようである。読後のインタビューで、工場では何を生産していると思うか尋ねたところ、「アザラシの皮を使って、なんか、生地をつくるのかな。分からないです。」と答えた。また、C もアザラシを捕るのは、その肉と油を得るためと発言している。そのため、A の場合と同様、合成皮革の工場だからこそ、アザラシ猟禁止後の代替案と成り得るという関係は、やはり理解できなかったと考えられる。C の場合、この点を理解できなかったことが、テキストの他の部分の理解をも困難にしたようであった。テキストでは、ラップランドの猟師たちは、以前はアザラシを狩ることを誇りに感じていたが、合成皮革の工場で働くようになってからは、アザラシを殺していた過去を思い出すのが嫌になったと書かれている。しかし、C は読後のインタビューで、元アザラシ猟師等は、以前の職業に郷愁を覚えていて、ときどきそのことを考えてしまうと述べている。これでは、全く反対の解釈である。C が単純に、テキストの該当部分を理解できなくて間違った思い込みをしたという可能性もあるが、そもそも工場で作っているかが理解できず、テキストがアザラシを保護することを肯定的に評価するスタンスに立って書かれていることに気づけなければ、アザラシを狩ることをやめ工場労働者となったラップランドの猟師達がアザラシ猟にどのような感慨を抱いているかをスムーズに理解するのは難しい。

3.1.3 “Una biblioteca sobre la vida y el comportamiento de las focas” の解釈をめぐる

A と C に共通してみられた解釈の問題点として興味深いのが、“una biblioteca sobre la vida y el comportamiento de las focas” (アザラシの生涯と生態に関する図書館) というフレーズの理解であった。テキストの第一段落によると、主人公 Jean は腕の良いアザラシ猟師であり、稼いだお金でアザラシに関する図書館を作ったと説明されている。この表現を二人の読み手は、書籍が置かれているような物質的な意味での図書館ではなく、比喩表現の一種だと述べた。C によると、図書館は「そういう物質的なことではなくて、多分図書館のようにアザラシのことについて全て知り尽くせる」ような何かを意味するのであり、A も “como buena biblioteca quiere decir como buena vida. como ha ganado mucho dinero” (良い図書館のようなもので、これは良い生活を意味する。たくさんお金を稼いだから) と述べている。この A の解釈によれば、人生、生活、生涯等と訳すことの出来る “vida” という単語は、アザラシの生涯ではなくて、主人公の生涯ということになる。

C は事後インタビューでこの点について質問しても上手く考えを説明できなかったため、両名が同じ理由から上記の表現を何らかの比喩表現だと理解したのかは分からない。しかし、A のインタビューのデータを分析すると、短いフレーズの理解であるのに多くの要因が重なり合って誤解を生んでいる様子を観察することができる。まず最初の問題は、前置詞 “sobre” の意味的解釈である。テキストの文脈では、「～について」という意味で使われているが、A はこの前置詞のもう一つの意味である「～の上に」という空間関係を表す単語として理解した。この解釈で訳を当てるなら、「生涯の上に」ということになろうが、どうも意味がはっきりしない。このはっきりしないことが逆に比喩表現だと思わせた可能性がある。第二に、主人公の住む地域は、世界の中でも最も住みづらい地域の一つ (“una de las zonas más inhóspitas del mundo”) と形容されているが、A は “inhóspitas” という形容詞の意味を知らなかったため、どんな地域について話しているのかイメージできなかった。スーパーもコンビニも公共施設も全て揃っているような地域ならば、今更図書館をつくる必要がないと考えたようで、「inhóspitas」っていうのが、もしすごい貧しいっていう

意味なんやったら、分かる、図書館」と述べている。しかし、他方で、主人公の住む地域が多様な施設の揃った地域でなかったとしたら、尚更そこに図書館のような実用的ではないものを作るということが不思議だとも感じたようで、「もっとねえ、直接的に役に立つもんないのかってねえ」「病院とか、cafeteria（喫茶店）とか、なんかもっと身近なことね」と発言している。つまり、不毛な地域ならまずは直接的に住民の生活に役に立つ施設を建設するのが普通であるというAの持っている価値観や背景知識とテキストの内容が上手く噛み合わないことも、理解の妨げになったことが分かる。第三の問題は、語句の区切りに関する間違いにあるが、これについては、Cも同じ誤解をした。“Una biblioteca sobre la vida y el comportamiento de las focas”は一続きの表現であり、主人公が作ったのは、「アザラシの生涯と生態についての」図書館である。しかし、AとCはこれを“una biblioteca sobre la vida”（生涯／生活／人生についての図書館）までを一区切りと理解してしまった。Cは、筆者に「“ha formado una biblioteca sobre la vida”は何かの表現ですよね？」「何かの expresión（表現）じゃないかと思って読んでました。」と述べた。Aも think-aloud protocols のデータの中で、“una biblioteca sobre la vida”という表現を読んだ直後に、“¡Biblioteca! ¿Por qué biblioteca? ¿Es una metáfora?, o no sé”（図書館！どうして図書館？これは比喻？それとも、分からない）と発言している。構文上一つのセットとなってる表現の後半部分を別に認識したため、“la vida”という語も誰かの人生なのか、生活なのか、アザラシの生涯なのか曖昧な意味しか掴めず、アザラシについての図書館というごく文字通りの解釈から離れて、何か新しい慣用語だと受け取ってしまった。

以上のように、このフレーズの解釈では、語彙や構文の理解といったよりローカルなディスコースレベルの理解が、読み手の背景知識とテキストの内容の間の食い違いというトップダウン処理に関わる問題と重なり合って、誤解を生じさせていることが分かる。しかしながら、この部分は、テキストの中心となる意味の流れに直接関わる内容を扱っていないことから、テキストの他の部分の解釈を歪めたり、内容の大筋に関わる誤解を生むことはなかったようである。

3.2 読解のプロセスとストラテジー

学習者AとBの think-aloud protocols のデータによると、Bはテキストのローカルなレベルの要素に特に注意を払って読むのに対し、Aはより大きなレベルの要素に注目するという対照的な傾向が観察された。読解の最中に観察されたBの14回の発言のうち、10回(71.4%)が単語の綴りや単語の意味といったローカルな要素への言及であったが、Aの場合はそれらの要素に触れたのは、21発言中7回(33.3%)にすぎなかった。このことから、Aは個々の単語などの言語的な要素以外に、文章全体の意味を考慮しながらテキストを理解するスタイルをとっていることが分かる。また、両者が使用した読解ストラテジーについても、Bがテキストの情報を表面的に認識するのみで、情報を互いに結びつけて総合的に理解しようとしなのに対し、Aはトップダウンとボトムアップの双方から、多様なストラテジーを駆使してテキストを読み進めていった。これは、Block(1992)が優秀な読み手の特徴として挙げているものと一致する。

Aが用いたトップダウン方向のストラテジーの多くは、他の研究でも指摘されているものであるが、例えば、テキストの先に書かれてある情報を予測する forward inferences(van den Bock, Ridsen & Husebye-hartmann 1995)や、理解した内容を要約する(O'Malley & Chamot 1990; Trenchs 1997)、より良く理解するためにテキストのある部分を読み返す(O'Malley & Chamot 1990)、読んで納得のいかない部分があったときにその部分に意味付けするために関係を創造する elaboration あるいは elaborative inferences(O'Malley & Chamot 1990; Horiba 1996)などがあつた。このように、Aはさまざまな読解ストラテジーを駆使しつつ、自分の持っている社会文化的な背景知識とテキストの内容とを関連づけ、テキストとの間で積極的にインタラクションを行いながら読解を進めた。それに対し、Bもテキストの内容を受けて、背景知識を想起したものの、その知識を上手くテキストの理解に結びつけることが出来なかった。

この二人の読み手の読解におけるストラテジー使用の違いを良く表す例が、テキストのタイトルを読んだ時の反応である。“El futuro de un cazador de focas”（アザラシ猟師の将来）というタイトルを読んだ直後、AもBもタイトルから自分の持っている背景知識を想起した。Aがアザラシの数が減少しているので、アザラシ猟が禁止されているのかも知れないと言いながら、アイヌ人とアザラシについて知っていることを思い出したのに対し、Bはテレビで大きなアザラシが車を押ししていたのを見たことを想起した。両者ともアザラシについて知っていることを喚起したという点

では一致しているが、読解をより良く進めるためのストラテジーとしては、A の思考の方がより役に立っていると思われる。それは、A が自身の背景知識を使って、テキストの内容を予測するという思考の方向付けを行っているのに対し、B は車を押すアザラシのことを思い出すのみで、それをもとにテキストの内容が今後どのように進行していくのかについて、予測しようとはしなかったからである。B がアザラシについて考えたことは、テキストの内容に興味や関心を持たせる意味で、先を読み進めるにあたっての情緒面のモチベーションを高めることには役立ったかも知れないが、自身の背景知識とテキストの内容とを関連づけながら、意味を構築するという面では、あまり効果を上げなかったと考えられる。

知らない単語の意味を推測するストラテジーにおいても、A と B には違いが観察された。B は、テキストを読みながら、8 つの単語の意味が分からないことを認識したが、そのうち3 つについては、意味を推測してみようとはしなかった。残りの5 つについて意味を推測するために B が使ったストラテジーは、すべて知っている単語からの意味の推測で、例えば、“salvanguardia” (保護) という単語を “salvar” (救う) と “guardia” (警備) に分けて考えるという方法である。この例のように、上手く意味を推測できた場合と、文脈に上手く当てはまらない意味を考えてしまう場合とがあった。意味の推測が失敗するのは、例えば、“repetidamente” (繰り返し) という副詞を、その語形の類似性から、“rápidamente” (早く) という他の副詞と同じような意味かと考えるようなケースである。B の問題点は、Frantzen (2003) も指摘しているのと同様に、語形が似ているということから単語の意味を推測しようとする場合に、推測した単語の意味が、その文脈に適切であるかということを考慮してみない点にある。B は筆者に対し、普段スペイン語のテキストを読む際に文脈から単語の意味を推測するというストラテジーをよく使うと述べたが、本研究の読解プロセスを観察する限りにおいては、文脈から推測するより、むしろ文脈を無視してしまう傾向が見られた。

これに対し、A は文脈を考慮に入れて単語の意味を推測した。分からない単語が少なくとも5 つあったが、そのうち語形の似た他の単語から文脈にふさわしくない推測をしたのは一度のみで、この時、“inhóspitas” (住むのに適さない) という単語について、“hospitalizados” (入院した) という単語から A が創造した実際には存在しない “inhospitalizados” という語と結びつけて意味を理解しようとした。しかし、think-aloud protocols の中で A が “inhospitalizados” と言ったすぐ後で笑っていることから、自分の推測が文脈に上手く当てはまらないと気がついたことが、推測できる。しかも、読後のインタビューの時点になって、“inhóspitas” という単語は、「貧しい」という意味ではないのかと新たに述べたことから、A が実は文脈を考慮に入れた別の推測をしていたことが伺える。「貧しい」という解釈は、辞書的な意味では正しくないが、このテキストの文脈の中では大きく逸れているわけではなく、“inhóspitas” を「貧しい」と理解して読み進んでも、テキスト全体の内容を解釈するには問題がないと思われる。その意味で、A の推測はかなり成功していると言える。

A は知らない単語の意味を推測するとき、その単語のだいたいのニュアンスを読み取り、より一般的な意味を持つ言葉に置き換えることで、文章理解の流れを断ち切らないようにするというストラテジーも用いていた。例えば、第2段落で “este error de apreciación es muy grave y se tendrían que tomar medidas de salvaguardia” (このような評価の誤りはとても深刻で、保護措置をとらなければならない) という部分がある。A は “apreciación” (評価) という単語を知らなかったが、テキストの直前の文脈を考慮にいれ、この単語をもっと一般的な意味をもつスペイン語の単語 “pensamiento” (考え) に置き換えて、アザラシの環境に及ぼす影響を過小評価する人々の考えについて書かれていると理解してテキストを読み進めた。これは、知らない単語の意味を正確に推測できなくても、文脈を断絶させずに意味を繋いでいく有効なストラテジーである。⁴ A は読後のインタビューにおいて、知らない単語に出会った時には、辞書を引いたり、スペイン語話者に意味を聞いたりすることが多く、文脈から意味を推測することもあるけれども、それは辞書や人に意味を聞くという外部の情報源を利用することに比べると頻繁ではないと答えている。本稿のデータで観察される限りでは、文脈からの意味の推測をかなり上手く行う読み手であるが、本人はそのことをあまり自覚していないようであった。

テキストを読み終わった後、調査対象者全員に読んだテキストは難しかったかと質問した。すでに述べたとおり、3人とも内容の大筋に当たる部分で重大な読み違いをしているのであるが、AとBはテキストは特に難しいと思われるような言語要素がなかったため、比較的簡単だったと答えた。Cのみが筆者から内容について質問されて、上手く答えられないことに気づき、自分がテキストを本当に良く理解したのかということに関して疑問を持つ様子を見せた。

4. 考察

外国語で書かれたテキストを読んで理解する場合には、読み手が書かれているテーマについてある程度の背景知識を持っていること (Floyd & Carrell 1987)、テキストの要求するレベルの言語能力を身につけていること (Horiba 1996; Lee & Scharllert 1997)、読解のためのストラテジーを有効に使用すること (Block 1992) 等が必要となる。本研究で使用したテキストは、特別な文化事情を理解していなければ読めないようなテーマを扱ったものではなかったし、スペイン語レベルも決して低くはない調査対象者にとって難しすぎる語彙や構文が使われている訳でもなかった。更に、Aのように読解ストラテジーを上手く使うことのできる学習者の例も観察することができた。これら読解が成功しそうな条件がそろっていたにもかかわらず、なぜ3名の読み手はテキストの内容を正確に理解できなかったのだろうか。テキストの細部の理解のみならず、内容の大筋を読み間違えてしまったのはどうしてだろうか。

まず、読み手の背景知識とテキストのテーマとの関係であるが、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編 (1992) によると、母語話者ではない読み手があまり馴染みのないテーマに出会ったとき、読み取った情報が自分の持っている背景知識と合致するように内容を曲げて理解し、そのことによって生じた解釈の歪みは無視してしまう傾向がある。これは、本稿の調査対象者にも見られた傾向であった。もし、読み手の持っている背景知識が、トップダウンのプロセスを妨げたのだとしたら、テキストのテーマ自体が、社会文化的に筆者が考えていた程中立的ではなかったという可能性がある。そもそもあるテキストのテーマが特殊なものかそうでないかということは、読み手の持っている背景知識とテキストの内容との関係で相対的に決まるものであり、どの読み手に対しても中立的なテーマというものを想定することには無理があるが、本稿の調査対象者の文化的知識がテキストのテーマと上手く合致していなかったという意味で、調査対象者にとっては「特殊な」テーマであったという可能性は否めない。例えば、AとCがアザラシ猟の目的をその皮ではなく、肉や油を手に入れることと考えてしまったことが、文脈を理解する障害となったことについて既に触れたが、もしかしたら日本人の読み手にとってアザラシ猟というテーマ自体がイメージしにくいものだったのかも知れない。もし、テーマがアザラシ猟ではなくて、ミンク猟だったらどうだろうか。日本人の読者にとっては、ミンクとその皮革という関係ならより理解しやすかったのではないか。

ただ、やはりこのテキストが調査対象者にとって非常に特殊なものであったと評価するには無理があると思われる。もし、調査対象者が同じテキストをスペイン語ではなく、日本語で読んだとしたら、それほど困難を感じずに理解できたのではと推測できるからである。スペイン語の読解で、読み手の背景知識が解釈の歪みに繋がったのは、背景知識そのものの特殊性のためというより、言語的知識の不足により、ボトムアップ・プロセスによって得られる情報が不安定で限られたものとなり、ボトムアップとトップダウンのプロセスが上手く相互作用できなかったことにも原因があるのではないか。

次に、読解ストラテジーの使用についてであるが、Aはさまざまな種類のストラテジーを用い、特にトップダウンのアプローチに長けた優秀な読み手の特徴を示したのに対し、Bは一つ一つの言語要素を個別に認識し、テキスト全体の意味の流れの中に位置づけることをしない対照的な読解プロセスを辿った。Bのストラテジー使用は、ボトムアップ型と言うことが出来るが、これは言語レベルの低い非母語話者の読解プロセスや (Horiba 1996)、母語話者でも読解が得手ではない読み手 (Block 1992) に特徴的にみられるものである。Bが自分でも言語学習があまり得意でないと自覚している学習者であることを考えると、本研究で使用したテキストの言語的なレベルがBにとって決して容易いものではなかった可能性がある。文章を理解するために語彙の意味や構文と言った言語的要素により多くの認知能力を割く必要があったため、ボトムアップのプロセスを中心とした読解をしたのかも知れない。もちろん、Bが母語である日本語でテ

キストを読んだ場合にも同じようにボトブアップ・プロセスに重点をおいた読解をする読み手であるという可能性も否定はできないが、本研究のデータの限りではBの日本語での読解プロセスについては知り得ない。

読解ストラテジーの使用の観点から、優秀な読み手である特徴を示したのはAであったが、そのAでも上手くテキストの内容と合致する解釈ができなかったことは興味深い。しかも、一般的に有効な読解ストラテジーだと考えられていることが、Aの読解では解釈の歪みを生む原因ともなった。その一例としては、テキストのタイトルを読んだ直後にAが行ったテキストの内容予測とアイヌの人々についての背景知識の想起があるが、このことがアザラシの狩猟目的を食肉のためと考えた原因の一つであり、Aのその後のテキストの解釈を混乱させた。同様に、“sintética”（合成の）という単語の意味を文脈から推測した際にも、むしろ文脈を考慮することが、Aが最初にこの単語の意味について考えていた正しい推測を覆して、全く正反対の意味を当てはめてしまう要因となった。そして、この間違っただけで推測した単語の意味が、今度はテキストの他の部分の理解を歪める結果にもなったのである。

Aの読解プロセスによると、ストラテジー使用が上手な読み手であるからと言って、必ずしも正しくテキストが解釈できる訳ではないということが分かる。しかし、解釈の歪みはあっても、Bの理解に比べてAの理解の方がより深く、また解釈のずれを引き起こす時にも、その理由が複雑であるということができる。例えば、カナダのニューファンドランドにはまだ工場が建設されていないということが二人とも理解できていなかったが、Bの場合には第3、4段落でラップランドの話が挿入されているということをももろ丸ごと無視していたということから、解釈の間違いを説明できる。これに対して、既に述べた通り、Aがこの部分を間違っただけで理解したのは、トップダウンとボトムアップの二つの認知プロセスにおける問題が重なり合った結果であり、Bの場合より間違いの原因が複雑である。

調査対象者全員がテキストの大まかな文脈を正しく理解することができなかったにも関わらず、誰もテキストが難しかったとは答えなかった点は、注目に値する。Cは筆者にテキストの内容について質問されてから、自身が本当に理解できたのかどうか少し疑いを抱いたようであったが、AとBはテキストの理解に特に困難はなかったと述べた。中でも、Bは読後のインタビューで、テキストではカナダの他にラップランドという別の地域も扱われているのだということを知られたが、そのすぐ後でも「これ、書いてあることは、辞書そんなに引かなくてもいけそう」と発言しており、自身のテキストの理解に大きな問題があったことをあまり気に掛けていないようであった。Carrell (1983)の研究では、非母語話者の読み手は、母語話者に比べてテキストの難易度を適正に評価することができないということが観察されているが、本研究の学習者も、テキストの難易度を的確に認知できたとは言いがたい。さらに、学習者が文章を理解すること自体について持っている言語学習に関する信念も、自身の理解度の評価に影響し得る。つまり、外国語でテキストを理解することが、テキストの全体的な意味の流れを把握することではなく、テキストに登場する一つ一つの語彙や構文を認識していくことに限られると考えているような場合、際立って難しい言語要素のない本研究のテキストは、簡単なテキストだという印象を与えてしまう。そのため、学習者がテキストを読むという行為をどのように理解しているか、理解することの意味をどのように認識しているかという点についても、今後研究の必要があるだろう。

テキストの難易度と同様、学習者が上手く評価できなかったのが、理解した内容の一貫性(coherence)である。読解の最中にも、読後のインタビューでも、テキストの異なる部分の情報がどのように構成されているかということが掴めていないのに、テキストの構成について注意を払わなかったし、理解した内容に矛盾があっても、そのことをあまり問題とは感じていないようであった。Horiba(1996)の研究では、非母語話者はテキスト全体を通しての一貫性にあまり注意を払わず、テキストの細部をより大きな文脈の中に位置づけずにテキストを理解しようとする傾向が観察されている。もし、本稿の調査対象者も lower standards for coherence (van den Boek, Risden & Husebye-Hartmann 1995)しか持っておらず、テキストの一貫性の欠如に対して敏感ではないのだとすれば、テキストの全体的な意味的繋がりを重視しないことは十分に考えられる。この傾向は、特にBの読解に顕著であり、Bはテキストの最後の段落を読み始めた時に、「Jean? Jean って何?」と発言している。言うまでもなく、Jeanはテキストの主人公の名前であり、テキストの内容はこの人物が現在直面している問題をめぐって展開される。そのため、テキストの文脈の流れを理解するた

めには、読解の間 Jean という主人公がいるということは最低限記憶にとどめておくべきことであり、それが分からなくなるというのは、全体的な文脈を理解することに関する B の関心の低さの表れであろう。

このように、テキストの内容の一貫性を理解できないというディスコースレベルでの問題が 3 人共通のものであったにも関わらず、C 以外は、事前に行ったアンケートにおいて、「個々の文章は理解できても、文と文との意味の繋がりが分からなかったり、文章全体の論理的構成が理解できなかったりする」という項目にはマークしなかった。これは、この種の問題が、学習者自身からは気づかれにくい性質のものだからであろう。未知の語彙や複雑な構文が理解を妨げることは、学習者にとっても分かりやすい問題であるが、文脈の一貫性の理解のように、学習者があまり自覚していないが問題になるような事項も存在する。学習者自身が自分の問題を正しく認識できないならば、読解力向上の妨げになるであろうから、読み手自身が無自覚な種類の問題についても今後研究していく必要がある。

5. おわりに

本稿の第一の問い（どのように日本語母語話者の読み手はスペイン語のテキストの意味を構築したか）に関しては、学習者が各々異なった認知スタイルや背景知識に基づいて、テキストを理解する過程が観察された。A のようにトップダウンとボトムアップの双方のプロセスを上手く相互作用させて読み進む学習者と、それとは対照的に、B のようにボトムアップ・プロセスに意識を集中させるため、テキストの大きな意味の流れを汲み取ることでできない学習者の読解を観察した。しかし、ストラテジーの使用に長けた読み手であっても、テキストの内容を適正に反映した理解に至ることはできず、どの調査対象者も読解に成功したとは言い難い。

第二の問い（上手くテキストが理解できない場合、どのようなことが原因となっているのか、特に学習者自身にも意識されやすい語彙力の不足はどの程度読解の成否に影響をあたえているのか）についてであるが、テキストのある部分が解釈できないとき、その原因は必ずしも一つの言語要素に帰することができるものではなく、いくつかの原因が複合的に関連し合っ、間違った内容解釈が生み出されていた。特に、テキスト全体の意味構成を上手く把握できなかったことや、読み手自身の解釈とテキストの内容との間に生じた矛盾を認識できなかったことが、テキストの意味の流れを理解する上で大きな障害となった。この点、学習者は自身がテキストをどの程度理解したかということや、読解においてどのようなストラテジーを使っているかということを含めて、スペイン語における自身の読解プロセスについて、比較的無自覚である傾向が見られた。語彙力の不足については、学習者自身も認識するように、スムーズな読解を妨げる大きな問題であることは疑いが無い。しかし、テキストの解釈の歪みは、一見一つの単語を知らないことのみから引き起こされているように思われる場合にも、実はテーマに対する読み手の背景知識や先入観、前後の文脈の理解等が関連して、複合的に生み出されることもあった。そのため、未知の語彙の問題は、文脈からの意味の推測を含め、トップダウンとボトムアップの双方のプロセスと関わる事項として認識する必要がある。

本稿では、調査対象者 3 名が一つのテキストを読むのに、それぞれ異なった思考の道筋をたどり、異なったストラテジーを用いて、異なった形で解釈を行う複雑な認知プロセスが観察された。スペイン語の授業で読解を扱う際にも、テーマに対する違った背景知識や価値観、認知スタイル等を持った学習者が各々のやり方でテキストを理解し、各個人がどのような認知プロセスをたどってどのような解釈に至るのか、それが外部から観察できないところに、教師の側の困難がある。背景知識の問題一つをとってみても、テキストが明らかに特殊な文化事情を扱っている場合には、授業の中で事前にそのテーマを取り上げる等が読解の助けになると考えられるが、本稿で使用したテキストのように、一見あまり特殊ではないテーマについても、読み手の背景知識や先入観によって、内容の解釈が大きく歪められるという可能性があるし、読み手がどのような解釈をするかということは、予測し難い。そのため、授業で理解した内容について教師が質問したり、学習者同士が互いにテキストの内容を説明し合う等して、学習者が構築した意味とテキストの内容とが本当に一致しているのかチェックする機会を設けることの重要性を再認識する必要がある。

付記：時間も労力もかかる今回の読解調査に快く協力して頂いた 3 名のスペイン語学習者に心から御礼を申し上げます。

注

1. スペイン語圏の文化的な話題についての文章では、それに関しての予備知識がないため、内容を理解できないことがあると回答した学習者は 49.7%、個々の文章は理解できても、文と文との意味の繋がりが分からなかったり、文章全体の論理的構成が理解できなかつたりすることがあると回答した学習者は 48.4%であった (Shinabe 2003)。
2. 使用したテキストの全文とその日本語訳は巻末資料 1 を参照。
3. アンケートは Shinabe(2003) で使ったものと同様の内容。
4. 読解において、このストラテジーは有効なものであるが、語彙の学習において同じように有効かは検討の余地がある。学習者が未知の単語に出会って、その意味を推測するとき、辞書に掲載されている正確な意味よりも、自身が推測した不正確な意味の方を良く覚えているというケースもあるからである (Parry 1991)。

参考文献

- Block, E. (1992), "See How They Read: Comprehension Monitoring of L1 and L2 Readers", *Tesol Quarterly*, vol. 26, n° 2, pp. 319-343.
- Carrell, P.L. (1983), "Three Components of Background Knowledge in Reading Comprehension", *Language Learning*, vol. 33, n°2, pp.183-207.
- Carrell, P.L. (1988), "Some causes of text-boundedness and schema interference in ESL reading", in P. L. Carrell, J. Davine & D. Eskey, *Interactive approaches to second language reading*, pp. 101-113, New York, Cambridge University Press.
- Cohen, A.D. (1998), *Strategies in Learning and using a Second Language*, New York, Longman, 2nd ed., 1999.
- Eskey, D.E. (1988), "Holding in the bottom: an interactive approach to the language problems of second language readers", in P. L. Carrell, J. Davine & D. Eskey, *Interactive approaches to second language reading*, pp. 93-100, New York, Cambridge University Press.
- Floyd, P. & Carrell, P.L. (1987), "Effects on ESL Reading of Teaching Cultural Content Schemata", *Language Learning*, Vol.37, No.1, pp. 89-108.
- Frantzen, D. (2003), "Factors Affecting How Second Language Spanish Students Derive Meaning from context", *The Modern Language Journal*, No.87, pp. 168-199.
- Geva, E. (1992), "The role of Conjunctions in L2 Text Comprehension", *Tesol Quarterly*, Vol. 26, No.4, pp. 731-747.
- Grabe, W. (1988), "Reassessing the term "interactive" ", in P. L. Carrell, J. Davine & D. Eskey, *Interactive approaches to second language reading*, pp. 56-70, New York, Cambridge University Press.
- Horiba Y. (1996), "Comprehension processes in L2 reading Language competence, textual coherence, and inferences", *Studies in Second Language Acquisition* Vol.18 No.4, December, pp. 433-473.
- Lee, J.-W. & Schallert, D.L. (1997), "The Relative Contribution of L2 Language Proficiency and L1 Reading Ability to L2 Reading Performance: A Test of the Threshold Hypothesis in a EFL Context", *Tesol Quarterly*, Vol. 31, No.4, pp. 713-739.
- O'Malley, J.M. & Chamot, A.U. (1990), *Learning Strategies in Second Language Acquisition*, New York, CUP.
- Parry, K. (1991), "Building a Vocabulary Through Academic Reading", *Tesol Quarterly*, vol. 25, n° 4, pp. 629-653.
- Shinabe, N. (2003), *Perspectivas y dificultades de los alumnos japoneses en el desarrollo de la comprensión de lectura*, サラマンカ大学外国語としてのスペイン語教育学修士論文 (未公刊)
- 杉山ますよ、田代ひとみ、西由美子 (1997) 「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日本語教育

92号』 pp. 36-47

- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編 (1992), 『学習者中心の英語読解指導』東京 大修館書店
- Trenchs, M. (1997), “A preliminary study of the reading process of non-proficient, non-native readers of literature”, *Eurosla’ 7 Views on the acquisition and use of second language*, pp. 343-351.
- van den Broek, P., Risden, K. & Husebye-Hartmann, E. (1995), “The Role of Readers’ Standards for Coherence in the Generation of Inferences During Reading”, in Lorch, R.F. & O’ Brien E.J. (Eds.), *Sources in Coherence in reading*, Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 353-373.
- van Dijk, T.A. (1983), “Estructuras textuales de las noticias de la prensa”, *Anàlisi: quaderns de comunicació i cultura*, 7-8, pp. 77-105.
- van Dijk, T.A. (1985), “Semantic Discourse Analysis”, in T.A. van Dijk, *Handbook of Discourse Analysis*, Vol. 2 *Dimensions of Discourse*, Academic Press, London, 1989, pp. 103-136.

[資料1] 使用したテキスト及びその日本語訳

El futuro de un cazador de focas

Jean es un cazador de Terranova, al norte de Canadá, una de las zonas más inhóspitas del mundo. Sus padres y sus abuelos también fueron cazadores. Desde hace diez años se dedica a cazar focas. Con el dinero que gana de la venta de los animales, ha mejorado su equipo de caza y ha formado una buena biblioteca sobre la vida y el comportamiento de las focas; por eso tiene fama, entre sus amigos y compañeros de profesión, de ser el cazador más experimentado de la zona.

La caza de focas es una manera de ganarse la vida para buena parte de la población de Canadá. No obstante, hay mucha gente que piensa que esta actividad se tendría que prohibir. Otros opinan que la matanza anual de casi 200.000 focas no altera el equilibrio ecológico de la zona. Pero este error de apreciación es muy grave y se tendrían que tomar medidas de salvaguardia. Una medida podría ser, por ejemplo, construir una fábrica de piel sintética de foca: esto daría trabajo a los cazadores y la venta de las pieles sintéticas generaría beneficios importantes para toda la región.

Así se hizo en Laponia, en el norte de los países escandinavos, en mayo de 1994, cuando el gobierno del país decidió prohibir la caza de focas debido a las protestas de los grupos de defensa de los animales. Los cazadores protestaron enérgicamente porque pensaban que desaparecería su manera de ganarse la vida. Pero finalmente tuvieron que cambiar de opinión y se construyeron cinco fábricas de piel sintética en la zona.

Desde entonces, la vida de los cazadores en ese país ha cambiado mucho. Al principio, había gente que no se acostumbraba al horario de la fábrica, pero poco a poco se ha ido adaptando a las características de su nueva profesión. Antes, todos estaban orgullosos de las focas que habían muerto, mientras que ahora ya ni se quieren acordar de su pasado.

El clima tan frío y la edad de Jean, que ya no tan joven, hacen que la caza de focas ya no sea un buen trabajo. La gente cada vez vive peor porque hay menos focas y resulta más difícil y peligroso cazarlas. Jean piensa repetidamente todo esto y habla con su familia, teniendo en cuenta la posibilidad de cambiar de profesión, ya que parece que el gobierno canadiense va a prohibir en breve la caza de focas.

アザラシ猟師の将来

Jean は、世界でもっとも住みづらい地域の一つであるカナダの北、ニューファンドランドの猟師である。彼の父親も祖父も猟師であった。アザラシ猟を始めてから10年になる。動物を売って稼いだお金で、狩猟のための道具を新調し、アザラシの生涯と生態についての図書館をつくった。そのため、猟師仲間の間では、地域で最も経験豊かな猟師として名高い。

アザラシ猟は、カナダの多くの住民にとって、生計を立てる手段である。しかしながら、この活動を禁止すべきだと考える人も多い。年間20万頭のアザラシの捕獲は地域の生態系には影響しないという意見もあるが、このような評価の誤りはとても深刻で、保護措置をとらなければならない。対策の一つは、例えば、アザラシの合成皮革の工場を建設することである。それは、猟師達に仕事を与えることになるし、合成皮革の販売は地域一帯に大きな利益を生むであろう。

スカンジナビアの国々の北に位置するラップランドでは、1994年の5月、動物保護団体の抗議を受けて政府がアザラシ猟を禁止した際、そのような対策がとられた。猟師等は、生計を立てる手段がなくなると考え、精力的に抗議を行った。しかし、最終的に意見を変えざるを得ず、地域に合成皮革の工場が5つ建設された。

そのとき以来、その国の猟師たちの生活は大きく変わった。初めのうちは、工場の就業時間になじめない人々もいたが、少しずつ新しい職業の特徴に慣れていった。以前は、皆、死んだアザラシのことを誇りとしていたが、今は過去のことは思い出したくもない。

寒い気候ともう若くはない Jean の年齢を考えると、アザラシ猟はもはや良い職業とはいえない。アザラシの数は減り続けており、狩猟がより難しく危険になってきているので、人々の生活は厳しくなっている。Jean は、カナダ政府が近いうちにアザラシ猟を禁止しそうであることから、これらのことについて繰り返し考え、職業を変える可能性も視野に入れつつ、家族と話し合っている。